

っている。自分の影がない日々が続くと、どことなく頼りなく、眼は、自然に足元と遠くを往復し、境界のなさが与える不安・ぼんやりとしたのっぺらぼうの世界に発生する畏怖に似た感覚が、人の心を蝕みはじめた。雨の水量の分だけ、正確に歩行者たちの力は低下している。水位があがればあがるほど、夏は遠のき、影たちは去り、人の心はのっぺりして沈んでいく。そして、どういふ訳だか知らないが、人の貌が、だんだん魚たちに似てくるのだ。

X氏は、朝の歩行を終えた。

白が宙に浮いて見えた。

診療室の扉を押すと、消毒液の匂いが漂い、白い制服が宙に浮いていて、それが窓の外を眺めている背中だと判断するまでに、3秒かかった。腰から下が机で隠れていたため、窓に白い制服が掛けているように思えたのだ。しかし、眼が慣れると、制服が中国服のように、身体にびったりと吸いついていて、丸い肩から腰にかけての曲線に女が認められた。肩から背中へとゆるやかに流れる曲線が、深く腰のあたりでくびれ、平原の豊饒さをたたえ、放射状のひろがりを見せている。放心していたのだろうか。

——よろしいですか

振り返った眼の、雨を眺めていたうつろな色が一瞬にして消え、静かに醒めた、よく光る黒く大きな眼への移行が見事だと妙に感心をして、X氏は、左手を差しだした。背中に滲みでていた女の

気配まで消えて、看護婦という職業が全身に漂い、眼に鋭い力を宿した時には、頼りなく立っている自分の姿が、逆に照らし出されているとX氏には思えた。

——どうかしました

看護婦はX氏の左手を支えて言った。

——噛まれました

——どこで

——駅で

——いつ?

——今朝、ほんの少し前に

——誰に?

——犬、犬にです

——犬ねえ

——なぜかしら

——……………

不意だった。黒い髪が肩から流れおちた。X氏の左手がすっぽりと黒い髪のなかに隠れた。唇が手の甲に触れている。傷口を強く吸った。X氏は、一瞬、身体を硬くして、のけぞり、匂いたつ髪